

語り継がれる戦の跡地

雪解け塚を訪ねて

船橋市内の児童が、地元で伝わる民話「雪どけ塚の白へび」をテーマに取材や写真撮影など新聞制作に挑戦した。日本財団などオールジャパンで推進する「海と日本プロジェクト」の一環で、国内に残された海にまつわる「民話」(伝承)を選定し、子どもがさらに次世代へと伝える機運醸成を狙っている。船橋市立小栗原小学校5年の天野翔太さんが執筆した紙面を紹介する。

村の人たちが協力して石像を作ったと言っていた。雪解け塚の石像とは、戦国時代に城が陥落した時に死者の怨念だと言われている。村人が亡くなった武士たちの遺体を埋めたところだそう。雪解け

た。その周りには草が生えていなかった。それも関係あるのだろうか。その舞台に今回、特別に訪問した。今でも残っているというところは大事にされていた事がよくわかった。戦国時代からこんな話が受け継がれていくほど大切にされてきたのだと感じた。



雪解け塚の舞台となった石像

土塁が語る城跡の真実

長福寺と雪解け塚の周辺を歩く



松の木があったとされる場所(提供写真)

白蛇がいたと伝えられる松の木があったとされる場所にも、今回特別に訪問させてもらった。松の木はそこにあったと言われているが、実際には見つからないため、確定ではないらしい。長福寺が夏見城だと分かった理由は、周囲に土塁が残っていたからだろう。常夜燈は灯明台としての役割は明治時代に終わったが、今も光を灯す機能は残っていて、成人式のイベントにも使われている(現在は新型コロナウイルスの影響で中止中)。松の木があったとされる横には石像が立っていた。周りは草と木で囲まれていた。今はその場所に松の木があるとは想像もできなかった。

船橋瞬メズスキと三番瀬の生き物たち

三番瀬の景色(提供写真)



船橋漁港の誇りと課題

「うたせ網漁」とは、風帆を船体に対して平行に張り、風力によって船を動かす漁法。動いているときに網を海に入れて、少し進んでから引き上げて魚をとる。三番瀬環境科学館の小澤鷹弥さんの話だと、海の生物の種類は100種類以上もいるそう。このあたりは、埋め立てによって海が狭くなってしまった。今も約60種類の魚の底の生き物が約200種類で約100種類の鳥を確認している。種類は増えている。だが、外来種の問題に悩んでいる。外来種とは、本来この地域にいなかった生物が、人の手によって持ち込まれたものである。船橋漁港はスキの水揚げ量が日本一で、「江戸前船橋瞬メズスキ」というブランド品がある。



教えてくださった教育委員会文化課板本健太さん

編集後記

新聞を作る楽しさ・大変さ

船橋市立小栗原小学校5年 天野 翔太さん

自分が思っていたよりも新聞を書くという作業は、とても難しいと感じた。これからは、頑張っ



天野翔太さん

海と日本プロジェクト

さまざまなかたちで日本人の暮らしを支え、ときに心の安らぎやワクワク、ひらめきを与えてくれる海で進行している環境の悪化などの現状を、子供たちをはじめ全国の人たちが「自分ごと」としてとらえ、海を未来へ引き継ぐアクションの輪を広げていくため、日本財団、総合海洋政策本部、国土交通省の旗振りのもと、オールジャパンで推進している。



「雪どけ塚の白へび」のワンシーン

雪どけ塚の白へび

昔、夏見城を囲む土塁の近くに「雪どけ塚」と呼ばれる不思議な小高い塚があった。松の木の根元の穴に住む白へびは夜になると姿を現し、光る目の美しさや、やさしく気品のあるたずまいで村人を魅了していた。ある日、出漁していた漁師が風に遭い、沖に流された。遠方に見つけた青い光を白へびの目だと信じて死に物ぐるいでかいをこぎ続けた…。

